

京都大学	博士（文学）	氏名	衣川 賢次
論文題目	『祖堂集』の文獻學的研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は中國禪（南宗）の完存する最古の燈史『祖堂集』の文獻學的研究である。具體的にはその成書過程の三段階（一卷本から十卷本への増廣、さらに増補と二十卷本への調卷、刊刻）を明らかにし、それが本文の言語の層に反映していること、またその本文の方言的背景に唐末五代期の南方方言が存在し、その本文校訂には音韻學的處理が必要であることを示し、こうした特徴をもつ本文の讀解を通して、唐末五代の禪思想を解明しようと試みたものである。本論文は全五章と附論五篇から成り、得られた結論を一篇の「『祖堂集』解題」にまとめて『祖堂集』テキストの性格を明らかにした。以下に各章の内容を要約する。</p> <p>「序論」では、『祖堂集』が20世紀初に學界へ紹介されてより百年にわたる研究史を年表に整理し、そこから『祖堂集』の文獻價值への學界の注目が「漢語史」と「中國禪思想史」にあることが知られ、この両面にわたる「『祖堂集』の文獻學的研究」の構想を提示した。</p> <p>第一章「禪籍の校讐學」では、北宋末12世紀初の『祖庭事苑』（睦庵善卿撰）を例として禪籍校訂の方法を歸納した。禪語録が難解である原因は、禪的思惟の理解が困難であるほかに、禪語録というものが禪僧の説法や問答の隨聞筆記であるため、本文に訛誤脱衍の現象が多く、讀解には文字校訂が要請されるところにある。『祖庭事苑』八卷は12世紀初に禪林で流通していた17部の禪籍校訂の記録と難解（あるいは特殊）な事項・語彙の解説2500餘條を収録した一種の禪語辭書である。本章ではこのうちの禪籍校勘の項目442條の内容を、清末の俞樾『古書疑義舉例』を参考に文字の誤りの類型として十二項に分類例舉し、かつ漢語史研究に有用な虚詞と方言詞の二項を取りあげ、睦庵善卿の禪籍校讐學としてその價值を論じた。『祖庭事苑』の禪籍校勘の項目には『祖堂集』本文の訛誤脱衍の情況と共通するものが多く、かれの校讐學は『祖堂集』校訂にも有用であることが知られた。</p> <p>第二章「『祖堂集』の成書」では、『祖堂集』の成立過程を解明した。</p> <p>（一）『祖堂集』二十卷は現在韓國國寶、世界文化遺産「八萬大藏經」の一部として慶尚南道伽耶山海印寺の大藏版庫に保管されている。20世紀初に日本人建築史家によって「再彫版高麗大藏經」（高麗高宗23年〔1236〕開始、38年〔1251〕完成）の版木の遺存が報告され、調査の結果、『大藏目錄』（1248年）に録する6558卷のほか、「補遺目錄」（1865年。高麗藏は禪籍を含まないため、その印成に際して禪籍を補遺とした）に列する15部231卷が含まれ、ここに『祖堂集』二十卷があり、「再彫版高麗</p>			

大藏經」彫造の時期に晉州南海に置かれた分司大藏都監によって刊刻されたものであることがわかる。

(二) 高麗版『祖堂集』二十卷は卷頭の泉州招慶寺主文僂の序、高麗釋匡儁の開版序から、最初は泉州招慶寺の靜、筠という二禪徳が小規模な「一卷本」を南唐保大10年(952)に編纂し、その後約10年以内に「十卷本」に増廣され、中國では宋代に失傳したが、高麗に傳わった十卷本に釋匡儁が入唐新羅禪師の八章等を増補し、高麗高宗32年(1245)に「海東新開印版」の「二十卷本」として刊刻されたことがわかる(従来は匡儁の開版序にいう「十卷」が文字の剝落によって「一卷」と判断されたため、「一卷本」が「二十卷本」となったと理解されていた)。

(三) この成書の三段階は言語の層として現れている。第一段階の「一卷本」(現行「二十卷本」のほぼ前二卷に相當)は、主として『寶林傳』(801年成書)から抄出し、南北朝時代撰述の佛教史籍の記述を交えて編纂した中唐期までの言語。第二段階の「十卷本」(現行「二十卷本」のほぼ卷3~19に相當)は、11世紀泉州で収集された資料にもとづき、唐五代の禪宗の活動、特に泉州招慶寺の系譜である福州雪峯門下の10、11世紀福建禪宗の活動を詳細に記述する晚唐五代の言語。第三段階の「二十卷本」の卷17、20の新羅八禪師の章は、新羅の碑文と禪僧の教理的著作にもとづいて書かれた域外漢文の言語。この成書の三段階は『祖堂集』が依據した資料の來源と性質を明らかにすると同時に、『祖堂集』の言語を研究する際の文獻情報を提供するものである。

(四) 敦煌文獻「泉州千佛新著諸祖師頌」(S. 1635號寫本、内題「西國二十八代祖師及唐土六祖師 後招慶明覺大師述」)は『祖堂集』一卷本に序を書いた文僂禪師の偈頌38首を寫した寫本である。また『祖堂集』の42章末尾に「淨修禪師讚」があり、そのうちの36首が「泉州千佛新著諸祖師頌」と同じである。このことから、文僂が泉州千佛院住持時代(天成年間[962~930]より開運初[944])に33首を作り、招慶寺住持となって「明覺禪師」と號した時期(944年より949年まで)に5首増加して38首となり、「淨修禪師」と號した時期(949年以後)に42首となったと推測され、これが『祖堂集』に附加されたことが知られる。それは『祖堂集』成書の第二段階においてであった。

第三章「『祖堂集』異文別字校證」では、『祖堂集』本文に多く現われる訛誤脱衍を校訂して正確なテキストを作成するためには、隨聞筆記によって同音・近音字を充てた異文別字に對して音韻學上の中古音、方言音の影響を考慮に入れた校證が要請される。そこで、①同音通用から發生した異文別字、②方言音による混同から發生した異文別字、③中古音が近いために發生した異文別字、④南方音の聲調が同じであったために發生した異文別字、⑤唐代の語音變化によって發生した異文別字、⑥聲母の清濁混用現象によって發生した異文別字、⑦唐代閩音によって發生した異文別字、の7項に分けて校訂の實例を示した。

第四章「『祖堂集』の方言的背景」では、漢語史學から注目される「10世紀福建泉州で編纂された『祖堂集』に閩語が存在するのか」という問題を論じた。まず梅祖麟氏が「『祖堂集』の方言的基礎とその形成過程」（1997年）という論文で、「『祖堂集』の大部分は晩唐五代の共通語すなわち北方語で書かれているが、僅かに引用の偈頌と會話に偶然垣間見える閩語の語法成分がある」として五項を挙げ、現代閩方言との對應、一致を例證した先行研究について、『祖堂集』の語法成分をいきなり現代方言と同定するのではなく、まず同時代の中古・近代漢語の用例を検討する必要がある、検討の結果、これらの語法成分は閩地とは限定できず、唐末五代の閩地にも通行していた南方方言であることを明らかにした。そのうえで、『祖堂集』に唐末五代の閩語がどのように現われているかという問題を、『祖堂集』における異文別字の音韻的解釋をもとに、異文別字例の方言音にかかわるものを聲母、韻母に分け、340首の所收偈頌の押韻状況を傍證として検討した。その結果、これらの方言現象は閩地だけに限定されるわけではないが、総合して見ると、『祖堂集』本文には南方方言中の閩音のもつ特徴的な文字づかいが現われており、『祖堂集』の言語の方言的背景として閩語を想定してよいと考えるに至った。

第五章「唐末五代禪宗の思想」では、『祖堂集』を資料にその讀解を通して唐末五代禪宗の思想の一端を明らかにした。『祖堂集』に収録された246人の傳記のうち、唐末五代南方の禪思想を比較的詳しく傳え、その本文が五代の時期の言語、特に南方方言の特徴をよく反映している「禾山和尚章」（卷12、禾山無殷 [884-960] の傳記）を讀解した。本章の本文中に180字の錯簡があるのを整理し、敘述に南方方言の口語語彙と語法が見られ、異文別字に南方方言音、閩音の特徴が現われていることを指摘して本文校訂をおこない、日本語譯と詳細な注釋を附した。禾山無殷の説法と對話には以下の特徴が看取される。

（一）禾山無殷は言語表現を重視し、禪宗傳承の故事（「話頭」、「公案」）を多く引用しながら禪理を説く點に特徴があり、正しい禪的思惟はいかにあるべきかを闡明するために、佛教教理學との相違を指摘し、禪思想に對する當時の禪界の誤解と偏向を剗剔することに力を注いだ。

（二）禪僧の行脚修行の目的はしかるべき師のもとで開悟の激發の契機を求めることであるが、禪宗界が大衆化した當時は師資對應の場における方便接化の方法的探究が必要となり、禾山無殷は「一問一答」から「無問無答」に至る独自の「禪の問答論」を展開した。

（三）佛教教理學の硬直への批判から出發した禪宗は、教理を超えることを目指して「教外別傳」を標榜したが、その禪的地平をも固定しない「向上」を禪宗の精神とした。教理學の「佛」を超えるべき「自己」、さらにその「自己」の地平にも安住しない「自己向上」を措定したが、禾山無殷はこうした觀念的超越主義に陥らない「精神の流動」を勧め、これが禪修行の核心たる「己事究明」の精神であるとした（第一節

「『祖堂集』卷12「禾山和尚章」の研究」）。

唐代禪の基調を定めた馬祖道一（709～788）の打ち出した「即心是佛」、「性在作用」（佛性はわが心にあり、それはわが行爲に發揮される）という佛性論、「見色即見心」（対象を捉える見聞覺知の作用を通してわが心を知る）という悟道論、「無事無爲」、「平常心是道」（理想を外に求めず、平常心で生活することが道の實踐である）という修道論が、百年後の禪宗界の大衆化によって庸俗的理解が蔓延したため、その克服が課題となり、「見色即見心」をどのように實現するかという悟道論の探究が改めておこなわれた。その具體的様相を10、11世紀福建の雪峯門下の資料を用いて明らかにした（第二節「感興のことば—唐末五代轉型期の禪宗における悟道論の探究」）。

「結論 『祖堂集』テキストの性格」では、上述五章の研究から得られた知見を、①再彫版『高麗大藏經』補板としての『祖堂集』、②『祖堂集』の成書、③『祖堂集』の方言的基礎、④中國禪宗史上の『祖堂集』の位置、⑤漢語史、禪宗史交融の文獻研究、として記述し一篇の「『祖堂集』解題」として提示した。

なお「附録」として（一）『祖堂集』偈頌詩韻・韻譜、（二）『祖堂集』同音通用字、（三）「『祖堂集』語法研究瑣談」、（四）「柳田聖山先生の『祖堂集』研究」、（五）「文僊禪師をめぐる泉州の地理」の五篇を附載して、『祖堂集』語法研究の現状、『祖堂集』研究史の概観、『祖堂集』をめぐる歴史地理のフィールドワーク等を補足した。

(論文審査の結果の要旨)

論者は禅籍研究の専門家として、長年、多くの禅籍の校訂や訳注に携わって来た。本研究は、その中でも論者が最も精力を傾け、1998年以来22篇の研究成果を世に問うてきた『祖堂集』研究を総括するものである。論者はこの研究を通し、唐代禅から宋代禅への推移の過程を明らかにするための最重要文献として、『祖堂集』の性格と位置づけを定めることを目指したとする。

『祖堂集』とは、南唐保大10年(952)の文燈禅師による序を有し、完全な形で伝わるものとしては現存最古の灯史とされる。中国では宋代には早くも失われていたが、二度にわたり高麗に伝わった十巻本に、さらに入唐新羅僧らの事蹟を加えて二十巻に増補し、高麗高宗32年(1245)に刊刻されたのが、現行の『祖堂集』であるという(論者の結論による)。『祖堂集』は、宋の大中祥符2年(1009)に完成した『景德伝灯録』と共通する内容も多く、相互参照が可能であるが、『景德伝灯録』には楊億ら文人の校訂が加わり本文が整理されたのに対し、『祖堂集』には文人による校訂作業が一切行われず、口頭の話しことばの聞き書きという元の姿が現在に至るまで残されている。そのため表記上の誤りは数多いものの、宋代禅形成以前の禅宗南宗の生の姿を伝える原資料として、同時に当時の口語資料として、極めて高い参照価値を有する。しかし、資料として活用するには、訛誤の多い本文の校訂が必須であるが、その作業は誰にでもできるような性質のものではない。本研究は、論者が過去に行った『祖堂集』本文の綿密な校勘作業に基づき、さらに方言や口語文法などの研究成果を活用し、『祖堂集』の再評価と歴史的な位置づけを行ったものである。重厚な研究成果であり、今後、斯学において常に参照される成果となるであろう。

序論では、『祖堂集』が再発見されて以降の研究史を概観した上で、従来の研究が直面してきた問題に『祖堂集』の難解さがあることを指摘する。その議論を踏まえ、第一章では、耳で聞いたそのままを記録する禅語録の本文が有する特徴を、実際に校訂を加えることを通して明らかにする。例として取り上げるのは、12世紀初頭に成立した、睦庵善卿撰による禅語辞書『祖庭事苑』八巻である。論者は睦庵善卿の綿密な禅籍校讎に立脚した語義の特定に基づく同書を高く評価し、その校讎学が『祖堂集』校訂に生かすこと、および禅語録を扱う上での問題点を明確に示す。

第二章は、『祖堂集』の成書過程を論ずる。成立に関して重要な情報を提供する敦煌資料、慧観「泉州千佛新著諸祖師頌」(S. 1635)に校訂を加えつつ、詳細な訳注を作成し、合わせて『祖堂集』に序を記した文燈禅師が泉州千佛院に住していた時に慧観も泉州に滞在していたことを手がかりに、『紫雲開士伝』などに記される文燈禅師の事績を詳細に比較対照し、『祖堂集』の基礎となった十巻の成立時期を考察する。さらに『祖堂集』にのみ見られる諸和尚の讚などの検討も加味した上で、成書段階を(1)一卷本、(2)十巻本、(3)二十巻本の三段階に分ち、現行の二十巻のどの部分にどの段階に成立した本文が含まれるかを提示する。これは非常に重要な指摘であり、今後、研究者が『祖堂集』を利用する際、必ず注意を払わねばならない成果

となるのは間違い無い。

続く第三章及び第四章は本研究の核心部分とも言うべき章で、『祖堂集』の本文を『景德伝灯録』や『五灯会元』などの関連灯史を用いて精密に校勘し、正確な本文を確定する中で浮かび上がった、用字や表現選択の特徴を論じる。冒頭でも述べたように、他の灯史とは異なり『祖堂集』は文人による本文校訂を経ていない。そのため、文字の訛誤や重複、逸脱など多くの問題が有るのだが、論者は自らの校勘により確定した本文と、版本の記述間の相違が如何なる要因で生じたのか、各種文献資料のみならず、中国語文法や方言研究の成果を踏まえて分析、記述する。本研究は、中国語学の研究ではないものの、提示される数多くの例文の中には、唐末五代から宋にかけての文法や音韻などに通ずると思われる言語現象が含まれる。また、『祖堂集』編纂に多くの福建出身の僧侶が関わったことを考慮するなら、当時の福建方言的特徴の反映として説明が付く現象も示されており、語学研究者にとってもその資料的価値は高い。

第五章は、『祖堂集』巻十二の「禾山和尚章」を取り上げ、その詳細な訳注を作成した上で、唐末五代の禅宗の思想的特徴をあぶり出す。『祖堂集』に収録される246人の伝からこの章を選んだ理由として、論者は、「唐末五代南方の禅思想を比較的詳しく伝え、その本文が五代の時期の言語、特に南方方言の特徴をよく反映している」章であることを理由に挙げる。「禾山和尚章」は、『景德伝灯録』には非常に簡潔に記録されるだけであり、彼の思想の本質は『祖堂集』でしか見られないものだという。論者は、同章に見られる総計180字の錯簡を丁寧に整理した上で、禾山和尚の禅思想を導き出す。その考証を踏まえ、唐代禅の基調を定めた馬祖道一の教えが大衆化したことによって生じた庸俗的理解を克服する中で、悟道論の探求が改めて実践された具体的様相を、福建の雪峯門下の資料群を駆使して明らかにする。論者が目標に掲げた、唐代禅から宋代禅への発展の道筋の解明が、ここにその一つの成果を結んだと言うことができよう。

結論は、これらすべての検討を通じて明らかになった『祖堂集』の性格を、一篇の「解題」の形で提示する。本研究の成果は即ちこの章にあると論者は考えており、簡潔ながらも、長年にわたる論者の『祖堂集』研究が結実した章と見なしうる。

このように極めて高い価値を有する本研究であるが、吹毛求疵ながら問題点が無い訳ではない。論者が言語的特徴として提示する数多の例は、それぞれ非常に貴重ではあるものの、論者自身による分析には、言語学的方法論の点での不徹底や一面的な理解が混在しているのが惜しまれる。しかし、そのような言語学的分析は、寧ろ後進に委ねられた課題として捉えるべきであり、本研究の価値を減ずるものとは言えない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和4年9月2日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。